

評論 (Review)

進路指導・キャリア教育の視点に立った カリキュラム・マネジメント

Curriculum management from the perspective of career
guidance and career education

青木 一起*
AOKI, Kazuki*

要 旨

本稿は、キャリア教育の推進と充実が提唱され約20年が経た現在、現行の教育現場におけるキャリア教育の実態を探るとともに、キャリア教育を見据えたカリキュラム・マネジメントの在り方を提案したものである。大学生のアンケートによるこれまで受けてきたキャリア教育の実態からは、職業体験や活動はあったものの、進路選択や将来像の形成に役立つ教育を受けている実感が無いとの回答が多かった。このような意識調査から今後のキャリア教育の方向性を考察するとともに、筆者が勤務していた公立小学校における進路指導を見据えたキャリア教育の推進及び充実を図るためのカリキュラム・マネジメントとその実践から、今後のキャリア教育の目指す方向性について考察した。

キーワード：進路指導、キャリア教育、カリキュラム・マネジメント、

Key words : career guidance, career education, curriculum management,

1. 進路指導とキャリア教育

少子高齢化社会の到来や経済及び産業の構造変化によって雇用形態が流動化し、若者の勤労観・職業観の希薄化や社会人・職業人としての基礎的・基本的な資質をめぐる課題、高い早期離職率や若者のフリーターやニートの存在が社会問題となっている。内閣府（2008）では、少子化社会白書の第1節において、子どもたちが勤労観・職業観を身に付け、明確な目的意識を持って日々の学業生活に取り組む姿勢や激しい社会の変化に対応し主体的に自己の進路を選択・決定できる能力を育成し、社会人・職業人として自立していくことができるようにするために、初等中等教育段階からにおけるキャリア教育の推進を求めている。ところで、進路指導とキャリア教育は何が違うのであろうか。中央教育審議会答申（2011）によると、「進路指導は、本来、生徒の個人資料、進路情報、啓発的経験及び相談を通じて、生徒が自ら、将来の進路を選択・計画し、就職又は進学をして、更にその後の生活によりよく適応し、能力を伸

長するように、教員が組織的・継続的に指導・援助する過程であり、どのような人間になり、どう生きていくことが望ましいのかといった長期的展望に立った人間形成を目指す教育活動である。このような進路指導のねらいは、キャリア教育の目指すところとほぼ同じである。」とされ、キャリア教育と進路指導とがほぼ同じ理念を掲げる教育活動であるといえる。しかし、長年「進路指導」という言葉は、学校教育法施行規則に掲げられる進路指導主事の役割が、生徒の職業選択の指導その他の進路の指導に関する事項をつかさどり、当該事項について連絡調整及び指導、助言に当たるとされ、入試突破や就職試験突破を目指す実践に偏っていたため、キャリア教育と進路指導、及び職業指導が混在してしまっているようである。そこで、文科省（2011）は、進路指導の定義自体が中学校・高等学校に限定された教育活動であることを前提として構想されてきたとして、キャリア教育は、就学前段階から初等中等教育・高等教育を貫き、また学校から社会への移行に困難を抱える若者（若年無業者など）を支援する様々な機関においても実践される一方、進路指導は、理念・概念やねらいにおいてキャリア教育と同じものであるが、中学校・高等学校に限定される教育活動であるとしてきた。

2. 特別活動の要としてのキャリア教育

OECD（2015）は、「日本の若者と雇用の報告書」の中で「学校から仕事への円滑な移行を促進し、青少年が彼らのキャリアや生活の中で前進する機会を与えられることを確実にすることは、長い間私たちの経済と社会にとって根本的に重要な問題」としている。また、2012年に行われた「国際成人力調査」（略称 PIAAC）など複数の国際調査や統計データを基に分析した結果、日本の若年無業者（ニート）は学力などに関する国際調査の成績が他国に比べて高いことが分かったと示された。文部科学省（2017）が学習指導要領（総則：小中共通）において、「（児童）生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」と明記した背景には、このような実態があったのではないかと考える。

そこで、本稿では大学生による意識調査から今後のキャリア教育の方向性を考察するとともに、公立小学校における進路指導を見据えたキャリア教育の推進及び、充実を図るためのカリキュラム・マネジメントとその実践から、特別活動の要としてのキャリア教育と目指す方向性について考えていきたい。

3. キャリア教育の実態と児童・生徒に与えた効果

中央教育審議会（2016）は、答申において「キャリア教育に関わる資質・能力」と

して、「基礎的・汎用的能力」の4つの能力（人間関係形成・社会形成能力，自己理解・自己管理能力，課題対応能力，キャリアプランニング能力）を統合的に捉え，資質・能力の三つの柱に沿って整理している。

そこで，教職課程「生徒指導論」受講生，教育学部3年163名に対して，キャリア教育に関する基礎的な事項として，「キャリア教育の基本的な方向性について」「キャリア教育で育成する基礎的・汎用的能力について」等の学習後，「失業率や自発的離職者（フリーター）数は年々増加していますが，なぜだと思うか」という課題意識をもたせた。そして，その後に「これまでの自らの小・中・高生を振り返ってキャリア教育に関するアンケート調査」（2019年7月実施）を試みた。これにより，現行の教育現場におけるキャリア教育の実態と児童・生徒に与えた効果について考察することにした。設問は，キャリア教育についての意識調査，自分のキャリアについての意識調査，及び，基礎的・汎用的能力についての自己評価，さらに，今の自分の現状から，汎用的能力の育成のために，学校でできるキャリア教育はどんなことがあると思うかという選択肢とともに，自由記述で小・中・高生の時に，どのようなキャリア教育が必要であったと思うかという，項目である。また，アンケートで用いた基礎的・汎用的能力に関する定義は，中央教育審議会答申（2016）を参考に学生に示し自己評価を促した（表1）。

表1. 「基礎的・汎用的能力に関する定義」中央教育審議会答申（2016）

<p>・人間関係・社会形成能力</p> <p>「多様な他者の考え方や立場を理解し，自分の考えを正確に伝える力や，協力・協働して社会に参画し今後の社会を形成していく能力」</p> <p>・自己理解・自己管理能力</p> <p>「自分のしたいことやできることを理解し，可能性を信じて行動したり，自分の思考や感情をコントロールし向上したりしようとする力」</p> <p>・課題対応能力</p> <p>「自分の身の回りや社会事象から様々な課題意識をもって課題を分析し，適切な計画を立てて処理，解決する能力」</p> <p>・キャリアプランニング能力</p> <p>「学ぶ，働くことの意義を理解し，自分の立場や役割の関連を認識したり，生き方に関する様々な情報を活用し，主体的に判断したりして生きていく能力」</p>
--

その結果，学生の多くは，キャリア教育と職業教育が混在し，中学校における職場体験が実感できるキャリア教育であったとする回答が目立った（図1）。しかし，職場体験もその選び方に不満や疑問を抱く学生も多く，自分の希望やキャリアを見据えた体験に必ずしもなっていなかったという実態からも，小・中学校においては，進路選択や将来像の形成に役立つ教育を受けている実感が無いとの回答が多かったのではないかと考える（図2）。

また，自分の将来の方向性については，大学3年生という事もあり，ほぼ決めてい

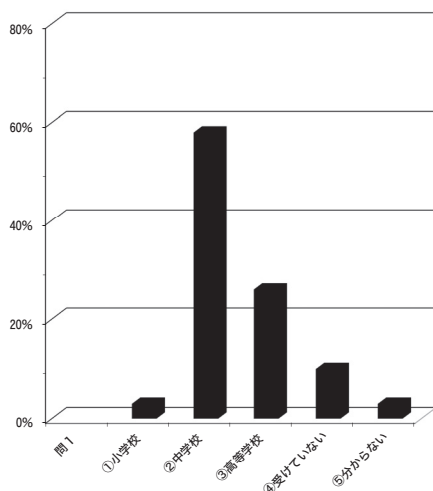


図1. 「問1 これまでにキャリア教育を受けたことがあるか」の集計結果

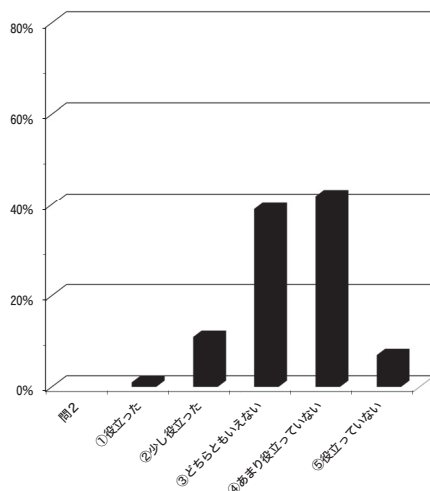


図2. 「問2 キャリア教育は進路選択や将来像の形成に役立ったか」の集計結果

るという学生が多い一方で、未だ迷いを生じている学生も相当数存在していた（図3）。これは、教員免許の取得を目指し、教職課程を専攻してきているものの、教員採用試験を受験するかどうかを迷っている学生が多いからである。「キャリア教育の手引き」（2011）においても、目的がはっきりしないまま高等学校へ進学したり、「とりあえず大学へ進学したりする生徒が多くいること、また、学校での生活や学び、進路選択に、子どもたちがはっきりとした目的意識をもって取り組めていないということが、キャリア教育にかかわる問題として浮かび上がってくる」としていることから分かる。人間関係形成能力についての評価は割と高い結果となっていた（図4）。これは、学生の多くが日常から部活動やアルバイトにおいて人間関係に気を配りなが

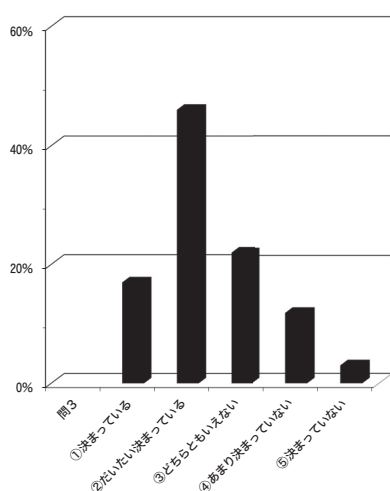


図3. 「問3 自分の将来のキャリアの方向性は決まっているか」の集計結果

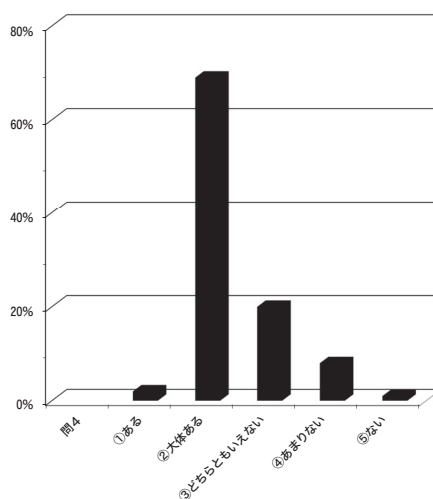


図4. 「問4 あなたは人間関係形成・社会形成能力があると思うか」の集計結果

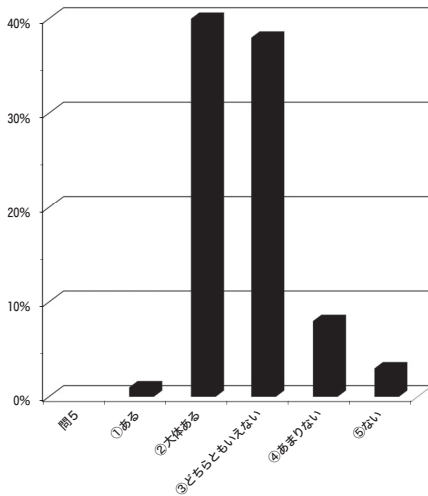


図5. 「問5 あなたは自己理解・自己管理能力があると思うか」の集計結果

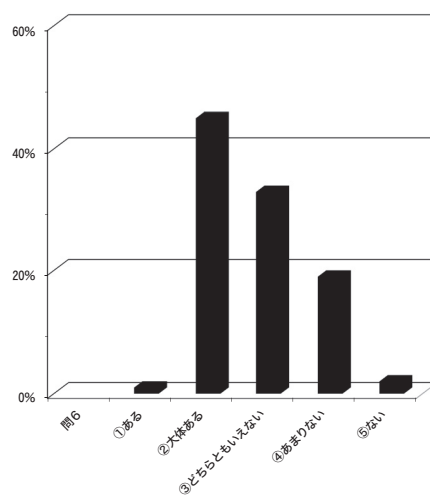


図6. 「問6 あなたは課題対応能力があると思うか」の集計結果

ら生活している経験からだそうである。自己理解・管理能力も約半数は大体あると答えている（図5）。しかし、つい、怒れてしまい感情のコントロールに自信のもてない学生もいることも聞き取りから分かった。課題対応能力については、「課題の分析、適切な計画の処理・解決」という言葉のハードルが高かったようで、それが評価結果に反映し、低い評価となっている（図6）。さらに、キャリアプランニング能力は、キャリアの方向性が決まっている学生が多く存在したわりには、やや低い傾向にあった（図7）。しかし、4つの能力についてのアンケート結果は、定義の言葉にかなり影響を受けたためか、客観的に結果を分析できる指標までには至らなかったのではな

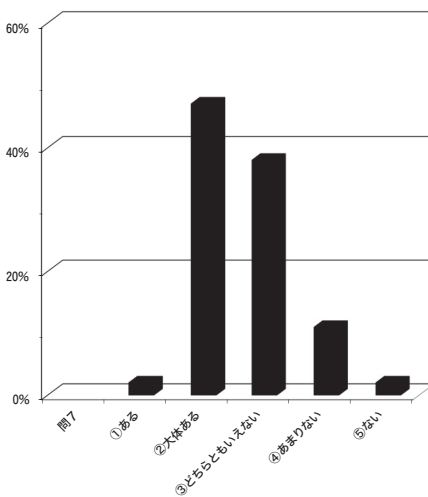


図7. 「問7 あなたはキャリアプランニング能力があると思うか」の集計結果

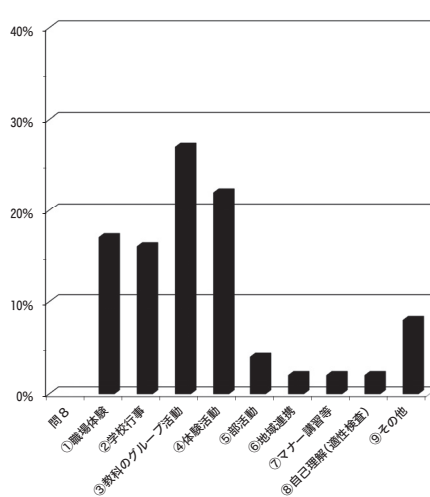


図8. 「問8 汎用的能力育成のために学校でできるキャリア教育はどんなことだと思うか」の集計結果

いかと考える。その一方で、問8と自由記述によると、「キャリア教育は小学校の早い段階から、教科におけるグループ学習におけるディスカッションや特別活動における学校行事で汎用的能力が育成できる」と考えている意見が多く表出していた（図8）。また、「特定の教科や活動だけにとらわれるのではなく、クラブ活動や部活動、学校行事など、組織の中でどれだけ自分が貢献できたかという自己肯定感が重要である」との意見も多数いた。さらには、「教育活動全体を通じて行うことが大切であるが、教師の力でねじ伏せるのではなく、様々な主体的な問題に立ち向かわせ自己決定できる場を増やし自立させるべき」との意見もあった。本アンケートを実施したことによって、自分のキャリアの方向性を決定する目の前の時期の学生にとって、これまでの教育を振り返る機会になったのみにとどまらず、これまでの活動や行事に自分なりの意味付けを思考することができたのではないかと考える。

日本進路指導協会（2006）が、高校生に対し今自分が通っている高等学校に入学した動機について尋ねたところ、普通科の生徒の約6割は「自分の学力にあっている」と回答し、「自分の個性を伸ばすことができると思う」「自分のやりたい勉強ができると思う」と答えた生徒はそれぞれ15%に満たないとの結果となったと言われている。また、大学生を対象として教育研究開発センター（2005）が行った調査では、職業を意識しはじめた時期の違いに応じて、大学生に大学への進学理由を尋ねた調査では、職業を意識した時期が遅い者ほど、大学への進学理由を「すぐに社会に出るのが不安」、「自由な時間を得たい」、「周囲の人がみな行く」と考える傾向があることも分かった。こうした調査結果からも、目的がはっきりしないまま高等学校へ進学したり、「とりあえず」大学へ進学したりする生徒・学生が多くいること、また、学校での生活や学び、進路選択に、子どもたちがはっきりとした目的意識を持って取り組めていないということが、キャリア教育にかかわる問題ではないかと考える。そこで、キャリア教育を効果的に展開し、資質・能力を育てていくためには、小中高大を通して各教科等での学びが、一人一人のキャリア形成やよりよい社会作りにどのようにつながっているのかを見据えながら、各教科等（特に学校行事や体験活動）をなぜ学ぶのか、それを通じてどういった力が身に付くのかという、教科等を学ぶ本質的な意義を明確にすることが必要なのではないかと考えた。

小学校学習指導要領解説「特別活動」（2017）では、一人一人のキャリア形成と自己実現のために、「現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成」「社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解」「主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用」など、小学校段階から特別活動の中にキャリア教育の視点を取り入れていくことは重要であるとされた。そのため、働くことの意義の理解や見通しを持ちながら生活するという、中学校以降のキャリア教育につながっていくものを整理し、そこで育成する資質・能力を明らかにすることや、児童生徒が活動を行うに当たって振り返ったり気付いたりしたことや考えたことなどを、児童生徒が記述して蓄積する、ポートフォリオ的な教材（いわゆる「キャリア・パスポート」）を活用することが示

された。こうした教材を活用することは、教育活動全体で行うキャリア教育の要としての特別活動の意義が明確になり、小学校から中学校、高等学校へと系統的なキャリア教育を進めることに資すると考える。しかし、2020年度から実施を呼びかけられているものの、学校間によって取り組みの差が大きいのが現状である。小学校から大学まで、その後の進路も含め、学校段階を超えて活用できるものとなるよう各地域の実情や各学校や学級における創意工夫を生かした形で活用をしていくことが大切であるとする。

4. キャリア教育の視点に立ったカリキュラム・マネジメント

教科等横断的な資質・能力として、国語科において、話し合いそのものを学習対象とした言語能力を中心にカリキュラム・マネジメントをし、各教科等において資質・能力型の授業改革に取り組んでいる筆者の前任校である名古屋市立大宝小学校のキャリア教育を見据えた特別活動の行事で考察する。大宝小学校では、急激に進行するグローバル化や少子高齢化等の時代の変化を乗り越え、新しい時代を切り拓いていくために、それに見合う資質・能力を獲得させていくことが必要であると考えた。そこでOECDとの共同による東京学芸大学・次世代教育研究推進機構のプロジェクトの研究を参考に、学校教育全体及び各教科等の指導を通して明確にすることが求められている「教科等横断的な視点に立った資質・能力」を「7つの力（批判的思考力、課題発見・解決力等）と8つの態度（やり抜く、自分を見つめる等）」として定義し、試案を作成した（図9）。この資質・能力は全教科等における単元の目標として、指導事項とは別に意識して取り組むようにした。また、大宝小学校では、言語能力の基礎基本を学ぶためのモジュール・カリキュラムとともに、思考スキルを活用し、論理的に思考したり、豊かに想像したりした内容を相手に分かりやすく伝える指導を意図的に指導している。そこで、本稿では、卒業を目前に控えた6年生のキャリア教育を見据えた特別活動の行事とそのカリキュラム・マネジメントについて考察する。6年生では、キャリア教育を見据え、単元「私の未来を描く」を設定し、各教科等横断

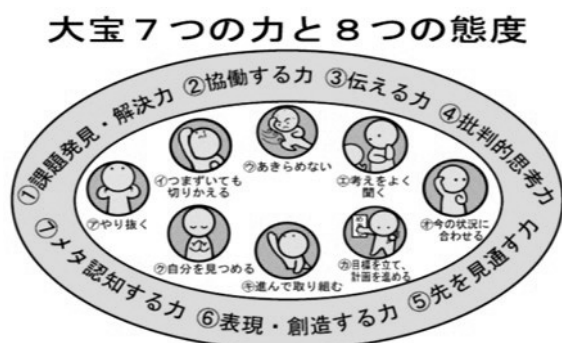


図9. 資質・能力と非認知能力を示す模式図

的にカリキュラム・マネジメントした（図10）。本単元で育てる資質・能力を先の7つの力より「先を見通す力・メタ認知する力」と設定した。そのための中心教材として国語科の「21世紀に生きる君たちへ」を据え、それを囲むように、言語能力、思考力などの点で様々な関わりのある各教科の学習を挙げ、教科を通してキャリア教育を意識付けた。そして、各教科で培った力を特別活動の行事「自分の将来をみつけよう。」につなげていき、教材と教材、教材とカリキュラムを構造的に連携させることにより、資質・能力の育成を図った。



図10. キャリア教育を見据えたカリキュラム・マネジメントの流れ

5. 特別活動におけるキャリア教育の実践

小学校には、多くの行事が存在する。体育的な運動会や文化行事的な学芸会、作品展などである。しかし、例えば、「何のために運動会や学芸会をやるのか？」という質問に、曖昧な一般論は言えても、明確に応えられた学生、児童生徒、教師は、残念ながら少ない。そこには、年間予定ですでに決定していた行事を例年のようにこなす作業が中心になってしまっていることに起因するのではないかと考えた。そのため、

児童生徒も教職員も目標を明確に意識するとともに、この活動を通じてどのような資質・能力の育成を目指すのかという共通認識が必要なのではないかと考えた。そこで、現在多くの小学校で実践がされている児童会の行事を、キャリア教育の視点で再編して実践した。従来の行事の多くは、各教室や体育館を用いてゲームコーナーを作り、互いに回って遊ぶというもので、保護者が参観する場合もあったようである。確かに、お化け屋敷的なコーナーがあったり、ハテナボックスがあったり、ボウリングやストラックアウトがあったりして一見楽しい。しかし、本来、楽しさというのは、外的要因ではなく、実は内的要因にある。すなわち、主体的に楽しむことができればつまらなくなくなるのである。だから、各教室のお店を回ることよりも、誰もが運営側を経験したいという点に着目した。まず、教室で実践可能な店舗の設計と運営、及びそれに必要な教材やコミュニケーション・マニュアルの作成を行わせた。学校教育現場で行う以上、教育的価値が必要であり、それも教科等横断的な視点に立った学びが重要である。子ども達の考えた店舗は、ゲーム感覚で行う体験的な活動が主であったが、何より、言語活動を中心とした、運営や接客から、人間関係形成能力を育むという意識をもって取り組んでいた。また、校区内にある大学と地域連携して、大学生によるダンスを通じた小学生との触れ合いの場の設定(写真1)や、保護者による体験コーナー、さらには、地域のパフォーマーによる演技、保護者でありプロのピアニストやバイオリニスト、ソプラノ歌手によるクラシックの演奏(写真2)等、開かれた教育課程による地域教材の開発が、社会参画力を育むことにつながったことが、振り返りのアンケート結果(表2)からも分かった。すなわち、新たな取り組みに終始するのではなく、従来行ってきた行事や教育活動を今回のように視点や観点を明確にして再編することで、将来像や進路、職業に意識を向け、未来を生き抜く子どもの育成につなげることができるのではないかと考える。



写真1. 大学生とダンスを楽しむ児童
(名古屋市立大宝小学校2019年1月26日)



写真2. プロの演奏を鑑賞する児童
(名古屋市立大宝小学校2019年1月26日)

表2. 行事に対する評価アンケートの集計結果

学年	総合満足度	キャリア	運営	客	ワークショップ	大学生	クラシック	大道芸
1	3.5	2.5	3.8	3.5	3.3	3.8	3.6	3.9
2	3.4	2.2	3.7	3.3	3.2	3.8	3.5	3.9
3	3.5	2.9	3.7	3.4	3.4	3.9	3.7	3.7
4	3.5	3.0	3.6	3.2	3.4	3.9	3.9	3.6
5	3.6	3.5	3.8	3.2	3.6	3.9	3.9	3.6
6	3.6	3.6	3.8	3.1	3.5	3.9	3.9	3.5
保護者	3.6	3.3	3.5	3.5	3.6	3.7	3.9	3.5
教職員	3.7	3.5	3.8	3.5	3.7	3.6	3.9	3.8
平均	3.6	3.1	3.7	3.3	3.5	3.8	3.8	3.7

6. 今後の課題

国立教育政策研究所（2013）は、小学校におけるキャリア教育の課題として「児童の発達の段階に応じた系統的なキャリア教育の実践のため、指導計画の作成を推進することと、児童のキャリア発達を促す上で欠かせない個別支援であるキャリア・カウンセリングの必要性、基礎的・汎用的能力に対する教員の理解」をあげている。大宝小学校の実践事例では、異校種間や地域、保護者との連携を図った取り組みで、言語能力を中心にカリキュラム・マネジメントして、基礎的・汎用的能力の育成を図っていた。そこには、教員と児童が少し先からもう少し先の将来を見据えて自らのキャリアを考えさせる目的があったからだ。しかし、様々な教科を通じて意識させてきたとはゆえ、どうしても、単発な一過性の行事になってしまう可能性もある。活動あって学びなしとならないよう、さらに体系的に教育課程を推進していく必要があると考える。

■参考・引用文献

- 青木一起（2019）「特別活動を要としたキャリア教育に関する教材・単元開発」日本教材学会研究発表要旨集，pp. 98-99.
- 青木一起・森和久（2018）「汎用的な言語能力を育む国語科カリキュラムの立案と実践」椋山女学園大学研究紀要，11：167-177.
- OECD 編著 濱口桂一郎 監訳（2010）「日本の若者と雇用」，明石書店，東京.
- 生徒指導・進路指導研究センター（2013）「キャリア教育・進路指導の実態に関する総合的な実態調査」.
- 中央教育審議会答申（2011）「今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（第3章3(1)).
- 内閣府（2008）「平成20年版 少子化社会白書」.
- 名古屋市立大宝小学校（2018）「教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成」大宝小学校研究紀要，2018年10月，名古屋.
- 日本進路指導協会（2006）「中学校・高等学校における進路指導に関する総合的な実態調査」.
- 文部科学省（2011）「キャリア教育の手引き」.
- 文部科学省（2017）「中学校学習指導要領総則編」.